

# ホステージ(人質)

2005(平成17)年6月5日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝フローラン＝エミリオ・シリ／出演＝ブルース・ウィリス／ケヴィン・ポラック／ジミー・ベネット／ミシェル・ホーン／セレナ・スコット・トーマス／ルーマー・ウィリス／ジョナサン・タッカー／マーシャル・オールマン／ベン・フォスター（松竹、東芝エンタテインメント配給／2005年アメリカ映画／113分）

……超豪華な別荘が3人組の若者に襲われ家族3人が人質（ホステージ）に……。さあ、主人公たる人質交渉人の登場だが、彼は前回の失敗に懲りて引退……。ところが何と今回は人質交渉人の妻と娘が人質とされ、その命と引き換えにある命令を受けることに……。さあ、職務の実行と妻娘の救出は両立しうるのか……。究極の選択の行方は……。50歳となり円熟味を増したブルース・ウィリスがよい味を……。

## 厳しいプロの世界！

人質交渉人が主人公となった映画は、『交渉人』（98年）、『ブルー・オブ・ライフ』（00年）、そして最近では日本でも『交渉人 真下正義』（05年）など次第に増えているが、どの映画を観ても、人質交渉人のプロとしての仕事の厳しさは、よくわかるもの。人質交渉人を主人公とした今回のこの映画の「ミソ」は、被害者としての人質（ホステージ）と、プロの職業としての交渉人を渾然一体とさせたところ……。つまり、（元）人質交渉人のジェフ・タリー（ブルース・ウィリス）がある事件を処理しているうち、自らの妻ジェーン・タリー（セレナ・スコット・トーマス）と娘のアマンダ（ルーマー・ウィリス）が某組織によって人質とされ、「ある命令」を実行しなければ、「妻娘の命はない！」という状況におかれるわけだ。

プロの世界が厳しいことは百も承知だとしても、それはその仕事上の世界におけるものであるはず。ところが、その仕事上の処理が私生活にまで影響を受け、

愛する妻娘が人質にとられるようなことになれば、それは大問題！ 私たちプロの弁護士の仕事だって、仕事とプライベートの区別をきちんとつけなければやっていけないもの……。こんな映画を観ると、「人ゴト」としては、極限状態に置かれたプロの人質交渉人の人間味あふれた涙ぐましい努力ぶりを見ることができて面白いものの、イザ、我が身におきかえてみると……。こりゃたまらん……。？

## 主人公はちょっとワケあり……。？

主人公のジェフ・タリーを演ずるブルース・ウィリスは坊主頭がトレードマーク……。ところが、この映画の冒頭で人質交渉人として必死に犯人を説得しているブルース・ウィリスは長髪の上、ボウボウとヒゲを伸ばした全く違うイメージのオッサン……。このとき、LAPD（ロサンゼルス市警察）に属していたジェフの努力の甲斐なく、犯人は自殺し人質も射殺されてしまう結果に。そのため、人質交渉人としての自信を失い、心に深い傷を負ったジェフは人質交渉人の仕事を辞め（？）、今は治安の安定しているヴェンチュラ郡の小さな町ブリスト・カミーノの警察署長として気楽な職務に従事していた。しかし、こんな田舎町での生活を拒否する妻のジェーンと娘のアマンダは、週末だけはここに来るものの、平日は田舎町の警察署長としてここで仕事に従事するジェフと別居状態に。そして父と母が離婚するのでは、という恐怖感をもった娘は、父親にも反抗的な態度を……。このように仕事でも自信喪失、家族関係でも危機というワケありの元人質交渉人の主人公ジェフはこりゃ大変……。？

## 若者3人組のワルさ加減は？

この映画でワル役（？）となるのは、デニス（ジョナサン・タッカー）、ケヴィン（マーシャル・オールマン）の兄弟、そして知り合ったばかりのマース（ベン・フォスター）を加えた若者3人組。リーダーはデニスだが、物語の進行につれてホントのワルは一見モノ静かなマースであることがわかってくる。また、弟のケヴィンはワルではなく、いつもトメ役……。？

少年犯罪が増えるとともに凶悪事件が増えているのは日本もアメリカも同じだ

が、根本的に異なるのは、アメリカは今でも銃が自由に手に入る社会だということ。その結果、この3人組は当初の目的であった車泥棒から、とんでもない大犯罪へと……。さらに、そういう場合必然的に生ずる内部対立の結果は……。ワルさ加減がモロに出てくる3人組内部の面白い内ゲバストーリー(?)をお見逃ししないように……。

## 被害者もワケあり風……？

若者3人組のターゲットとされたのは、白い高級車に乗った親子3人連れ。娘のジェニファー（ミシェル・ホーン）は大金持ちのお嬢サマとしてデニスも顔を知っている女の子。パーキングで顔を合わせたデニスが目で合図を送ったものの、ジェニファーからは「FUCK YOU！」というきつい態度を示された……。お嬢サマたるものは、こんな連中を挑発したりせず無視するのが1番なのに……。これに挑発されたデニスは、ジェニファーが乗っている高級車を盗んでやろうと決心。こんな単純なやりとりがコトの発端だから世の中は面白い……？

ジェニファーの父ウォルター・スミス（ケヴィン・ポラック）が運転する高級車は、小高い丘の上にある別荘の中に入っていったが、これがものすごい大邸宅。その大邸宅の中で、ウォルターがジェニファーや弟のトミー（ジミー・ベネット）に示す父親ぶりはそれなりに洗練されたもので、良きパパぶりを発揮しているが、どうも1人書齋でやっていることは、ワケあり風……。仕事中に書齋に入ってきたトミーを体よく追い出した後、本棚にしまった1枚のDVDは一体ナニ……？

## お屋敷は完全セキュリティだが……？

ウォルターの車が入って行った別荘は想像を絶するエラく立派なもので、セキュリティシステムも万全。監視カメラが至る所に設置され、それをチェックするモニターも使い勝手のよさそうなもの。ところが今の時代、何事も共通だと私は思っているが、問題はシステムの優秀さではなく、それを扱う人間の優秀さ！ 後述のように、この超豪華な別荘のIT.システムをウォルターは当然理解しており、IT.少年の息子トミーも理解していたようだが、こんなモニターのチェック

のためには24時間監視体制が必要なことは当然！ ところがこの映画では、なぜかこの別荘にはそれ専用の人間がいない。まさかお金をケチっているわけではないから、こりゃあまりに不自然なことは明らか。しかしそれは、映画のストーリーをシンプルにするためのテクニックだから仕方なし……？

せつかく大金をかけて、完全セキュリティのシステムを整備しても、モニターのチェックが不十分であれば、賊の侵入を見逃すことになるのは当然。そういう意味では、何が天災で、何が人災かの区別は微妙で難しいもの。JR 福知山線の尼崎駅直前での脱線転覆事故にしても、ATS（列車自動停止装置）を整備していれば事故はなかったのに、という仮説も、ホントはインチキと考えるべきなのだが……？

## やっぱり男の子はエライ！

こう言うと男女差別になるのかもしれないが、14歳という年頃の娘ジェニファーは、露出過剰ぎみのセクシーな服を着て父親のウォルターから注意されたことにふくれるというレベル……？ ところが弟のトミーはエライ！ やっぱり男の子！ IT.技術によって要塞みたいに完全セキュリティ化されていても、それを扱うのは人間だから、そのシステムの意味や活用の仕方そして少なくともスイッチの押し方を理解していなければ全く無意味。もちろんウォルターはよくわかっているが、娘のジェニファーは全くわかっていない様子。しかし弟のトミーがこれをよく理解していたことは、若者3人組に侵入されたことを知ったとき、とっさにトミーが非常ボタンを押したことによってよくわかる。もっとも、この警報を聞いた地元の婦人警官が直ちにこの別荘に駆けつけたため、ある1つの悲劇が発生するのだが……？

さらにトミーがエライのは、この要塞のような完全セキュリティの別荘の屋根裏部屋や換気のための通路、そしてジョディ・フォスター主演の『パニック・ルーム』（02年）以来、一躍日本でも有名になった「パニック・ルーム」の機能まですべて理解し、把握していること。頭でっかちのIT.少年かも知れないが、これだけ大規模な別荘のIT.システムをすべて理解しているうえ、少年特有のすばしっこさや、機転を備えているのはたいしたもの。ジェフと携帯で連絡を取り、

問題のDVDを捜し出すあたりの行動もチョー優秀！これはやはり、少しワルだが頭のいい会計士の父親ウォルターの血を受け継いでいるのかも……？

## 大事件は主人公の管轄内だったが……？

こんな大事件が起こったのは、治安良好だったはずのジェフの管轄区域内。したがって、ウォルターの別荘から報じられた警報によって直ちに駆けつけた婦人警官の「悲報」を聞いて、現場に駆けつけたジェフは、さすが優秀な警察署長として現場では適切な処置をとり、その後の犯人への対応については、郡警察の指揮に委ねた。また犯人への説得についても、前回の失敗に懲りて人質交渉人から足を洗っていたジェフは、顔見知りの人質交渉人にすべての処理を委ねて現場を去って行った。そして自分は、テレビでこの事件を知った妻子と携帯で連絡を取り、自分の無事を知らせたうえで、一刻も早く妻子の待つ自宅へ帰ろうとしたが……。

## こりゃたまらん、人質交渉人の妻と娘が人質に……

車に乗り込んだとき、ジェフは突如後部座席に潜伏していた覆面の男から銃を突きつけられた。いくら警察署長であってもこりゃどうしようもなし。車を運転させられて、ある場所で停車したが、その後ろにはもう1台の車が……。そしてその車から乗り込んできた、これも覆面の男はプロ中のプロ。ジェフの両手をハンドルにクロスさせて手錠をかけたうえ、後部座席から羽交い絞めにした状態で冷静に「バックミラーで後ろを見ろ」と命令されて後ろを見ると、何と後ろの車の中には、猿ぐつわをされ手を縛られ、自由を奪われた妻と娘が……。こりゃ一体何だ！ 何のために、オレの妻や娘が……？

## 謎の男たちの命令は……？

手錠をかけられたまま暴れ、わめこうとするジェフに対して、語りかける謎の男はあくまでクールに、「ある行為」を実行するよう「命令」した。それは、あの小高い丘の上に建っている別荘内で展開されている人質事件の当事者となったウォルターが持っている1枚のDVDを持ち出せ、というもの。「俺はもうあの事

件からはずれた！」と正直に今の状況を説明するジェフだったが、そんな説明はこの覆面の男たちには通用しない。何者かわからないものの、この命令に従わなければ妻と娘の命が奪われる！ そう確信したジェフには、今や他の選択肢は存在しなかった。ジェフは直ちに現場にとって帰したが、その途中ラッキーなことに(?) ウォルターの息子トミーと携帯電話で連絡をとれることに……。さて、これから後のジェフの活躍ぶりは見モノ……。しかし、自分の妻や娘が人質とされた中で、「仕事」を続けなければならないとは、何とも辛いこと……！

## 携帯電話はこんなに万能……？

携帯電話が果たす役割は映画の世界でも急上昇しているが、この映画でも、隔絶されたお屋敷とジェフを結ぶ唯一の道具は携帯電話。ジェフから邸内の電話にかけてデニスに話しかけたり、秘かに息子のトミーの持つ携帯電話と連絡をとって秘密の指示をしたりするのは、すべてジェフの携帯電話。また謎の覆面男から、ここに連絡するからと言われて渡されたのも1台の携帯電話。ジェフはこの2台の携帯電話を器用に使い分けながら、激変していく事態に対処していくわけだが、携帯電話は便利な面はあるものの、時としては、肝心の時に電波状態が悪く通じなかったり、聞きづらいことがあるのも常識。したがって、ホントは携帯電話ってこの映画のように万能ではないはずだが……？

## 人質救出はなるのか？ また DVD の運び出しは？

この映画評論ではストーリーはあまり紹介せず、登場人物たちの人物像や建物のセキュリティ機能などに重点をおいて評論してきた。それは、2つの人質事件を同時並行的に展開させるこの映画の面白さをネタバレにする危険を避けるため……。ジェフは、人質とされている自分の妻と娘の命を救うためには謎の覆面男たちの命令に従わなければならないうえ、当面は別荘での人質事件を「解決」しなければならないが、それは当然至難のワザ。さあ、ジェフはこれにどのように対処していくのだろうか？ そして、別荘からの人質の救出はなるのだろうか？ また DVD の運び出しとジェフの妻と娘の救出は？

2005(平成17)年6月7日記